

実践報告

社会的意見の質を高める社会科の授業づくり — 「わたしたちの暮らしを支える情報」の実践を通して—

金子 宏幸*

Creating Classes in Social Studies that Enhance the Quality of Social
Opinion :
Through the Practice of "Information that Supports Our Lives"

Hiroyuki KANEKO*

【要約】

社会科では社会的事象の意味や意義を解釈することはもちろん、それらを説明したり自分の考えを論述したりすることが重視されている。本実践では、児童が実社会の社会問題に対して関心をもって調査活動を行い、その解決策等に誰もが納得できる考えをもつことができることを目指した。社会問題に対し、複数の状況や立場からその解決策を考えさせることで社会的意見の質を高めていく授業づくりについて報告する。

【キーワード】

問題意識, ミニ討論, 複数の立場

1 主題設定の理由

社会科学学習において、これまで誰もが見て聞いて納得できる意見のことを社会的意見とし、その形成のために実践を行ってきた。現実の社会問題の解決策を考える学習過程において、社会問題の背景にある状況を見出す活動を設定することで、社会的事象の意味、意義を解釈させたり、事象の特色や事象間の関係を説明させたりしてきた。また、解決策を判断させる授業終末の場面や単元終末の討論の場においても自分の考えを論述させる活動を行ってきた。その結果、問題の背景を俯瞰的に見させたり、逆に、状況という決められた枠組みの中で関わる立場と受けている影響に焦点化させたりして解決策を考えさせていくことができた。しかし、児童の単元末のパフォーマンスを見てみると、状況認識が不十分で社会の問題を自分のこととして捉えられていなかったり、限られた立場への影響を考慮して賛否を判断したりしている様相が見られた。

本実践では、児童が社会問題に対し問題意識や切実感をもって学び、社会的意見が、自分とは異なる立場を考慮する解決策の段階から、学習が進むにつれて、多くの異なる立場を考慮した解決策の段階まで変わっていくことを社会的意見の質が高まると捉え、討論などの活動を通して社会的意見の質を高めることができる児童の育成を目指した。

2 研究のねらいと手だて

本実践では、小学5年生を対象とする。児童が、被災地から視聴者や被災者が不快に感じる報道が行われているという社会問題に対し、情報を発信する側や受信する側で大事にしなければいけないこ

*佐賀大学教育学部

とは何かという社会的意見の質を高めることをねらいとした。そして、そのためには、どのような手立てが有効かを探ることとした。以下の3点をその手だてとした。

- ①問題意識や切実感をもって社会問題に向き合わせるための教材開発や資料提示
- ②複数の立場を考慮しての判断と提示資料の工夫
- ③3回のミニ討論とそれらを総合してのパフォーマンス

3 指導の実際

(1) 単元について

単元名【わたしたちの暮らしを支える情報】－被災地からの情報について考えよう－

(第5学年 実施時期…H27.7 実施児童…5年3組35名)

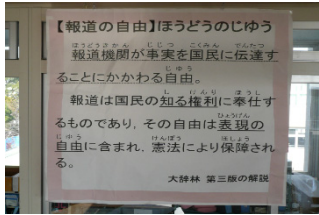
近年は社会の情報化が進み、パソコンやスマートフォンなどの情報機器の多くがインターネットなどの情報ネットワークで結ばれることによって、必要な情報をいち早く受け取ったり、情報を多くの人に発信したりすることが可能となった。また、新聞やテレビなどのマスメディアが世界中で起きている出来事や情報をリアルタイムで伝えることで、市民は大量で多種多様な情報を得ることができるようになった。しかし、個人情報の流出をはじめ、捏造された情報や間違った情報の発信など、問題点も多数見られるようになってきている。時には、そのような情報のために銀行に長蛇の列ができたり、スーパーの一部食品が品切れになったりするなど市民生活に影響を与える場合もある。児童においても、SNSで個人情報を発信したり、なりすましによる情報を信じたりして、自他に害を与えることが考えられる。

そこで、児童が膨大な情報から自分が必要とする情報を取捨選択し、活用することが大事であることを考えることができるようにしたいと考えた。

(2) 単元の展開

表1 単元の流れ

時	主な学習活動	教師の主な働きかけ
	<ul style="list-style-type: none"> ○ 熊本地震について想起した。 <ul style="list-style-type: none"> ・4月だった。 ・けっこう揺れを感じた。 ・テレビが地震情報ばかりになった。 ○ 熊本地震に関するアンケート結果を知った。 <ul style="list-style-type: none"> ・テレビから情報を得ているとも友達がほとんどだ。 ・生き埋めの情報でこわくなった。 ・見たくない情報があると答えた人が多い。 ○ パフォーマンス課題について知った。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 熊本地震について問いかけ、知っていることやその時の様子などを発表させた。 ○ 事前のアンケート結果を提示することで、テレビを中心としたメディアから情報を得たことを捉えさせた。 ○ 熊本地震について、自分たちも体験したもの(当事者)であることや被災地からの情報で熊本城が壊れる様子を伝えるものなど見たくない情報があったことを捉えさせた。手立て①
	<p>【パフォーマンス課題】 熊本地震では、被災地から発信された情報により、私たちは大きな影きょうを受けた。一方で、問題視されている情報もある。そこで、情報を発信する側や受信する側が大事にしなければいけないことは何かを考えて意見文にまとめ、テレビ局に提出しなさい。</p>	
	<ul style="list-style-type: none"> ○ パフォーマンス課題から、調べるべき問いを作った。 <ul style="list-style-type: none"> ・問い① どんな情報が発信されたのか。 ・問い② テレビ局はどうやって情報を発信したのか ・問い③ 問題になっているのはどんな情報か。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ パフォーマンス課題の「様々な情報」という言葉に着目させた。震源やその深さ、震度など児童が思いつくままに発言する内容をまとめ、問い①を作った。 ○ 問い①から発展して問い②と問い③を作った。

2	<ul style="list-style-type: none"> ○ テレビが被災地からどんな情報を発信したのか調べた。問い① <ul style="list-style-type: none"> ・ 震度・被害の様子 ・ 避難の様子 ・ 必要な物資や支援方 ・ 地震の説明や津波について 	<ul style="list-style-type: none"> ○ タブレットで実際のニュース「NHK NEWS WEBニュース 特設 熊本地震」のサイトを自由に視聴させた。 ○ 被災地から発信された情報を分類できるようにウェブページ上のタグを利用させた。 	
3	<ul style="list-style-type: none"> ○ テレビ局がどうやって情報を伝えたのか調べた。問い② <ul style="list-style-type: none"> ・ 取材の仕方 ・ 記事の書き方 ・ 中継の仕方 ○ 被災地からレポートをしたアナウンサーの話をビデオで視聴した。 ○ 報道の自由と知る権利について知った。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ NHKが作成したパンフレットや動画を視聴させた。 ○ 報道関係者がどんなことを大事にして情報を発信しているのかを捉えさせた手立て① 	 <p>図1 報道の自由についての提示資料</p>
4	<ul style="list-style-type: none"> ○ 問題視されている情報について調べ、その情報が必要か必要ないか価値判断を行った。問い③ <ul style="list-style-type: none"> ・ 深夜、休んでいる被災者にライトを当てて取材する情報。 ・ 亡くなった人の氏名やプロフィールなどの情報。 ・ 熊本城が壊れる様子を伝える情報 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 熊本城観光交流サービスの吉川さんへのインタビュー動画を視聴させた。 …手立て① 	
5	<ul style="list-style-type: none"> ○ 問題視する情報の必要性について、ミニ討論①～③を行った。 <ul style="list-style-type: none"> ①夜、休んでいる被災者にライトを当てて取材した情報 ②亡くなった人の氏名やプロフィールを伝える情報 ③熊本城が壊れる様子を伝える情報 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 報道関係者と視聴者、被災者の三者の立場から考えさせた。 …手立て② ○ ミニ討論毎にパフォーマンス課題への考えを書かせた。 	
6	<ul style="list-style-type: none"> ○ 3回のミニ討論を基に、パフォーマンス課題への自分の考えをまとめた。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 情報を受信する側と発信する側のそれぞれで大事にしなければいけないことをまとめさせた。 …手立て③ 	
7	<ul style="list-style-type: none"> ○ テレビ局へ意見文を書いた。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 前時のまとめに、根拠となる具体例を付け加えさせた。 	

(3) 手だてを生かした指導

ア 問題意識や切実感をもって社会問題に向き合わせるための教材開発

2016年4月14日に熊本を震度7の地震が襲った。その揺れは、児童が住む佐賀市周辺でも感じることができた。被害の様子はテレビ等で生中継され、被災地の生々しい様子が遠く離れた家庭でも見ることもできた。一方で、被災地の人々のプライバシーを侵害しているのではと思われる取材方法や内容が見られ、BPO（放送倫理・番組向上機構）でも取り上げられるなど社会問題となった。

児童に対するアンケートの結果によると、全員の児童が強い揺れを感じていた。それにより、驚きや恐怖を感じたことを回答していた。また、全員がテレビなどのメディアを通じて、地震の様子や被害の様子などについて情報を収集していた。(図1)中には、深夜まで家族とともに被災地からの情報や今後の対応について情報を得ていた児童もいた。アンケートの結果によると、実際に一緒に住む家族が怪我をしたり、家屋に被害が出たりした児童はいなかったものの、強い揺れを感じたことで、熊本地震に対する当事

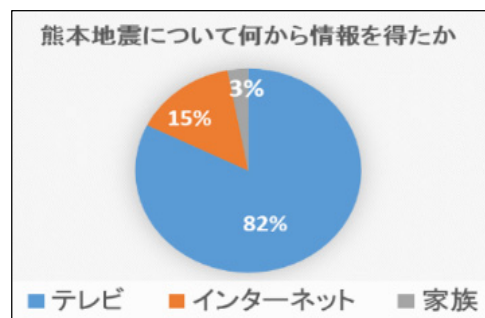


図2 5年3組熊本地震アンケート結果1

者としての意識が芽生えたと考えられる。

者意識は強いものがあることが分かった。中には、祖父母や親せきが被災した児童もいて、熊本地震を自分にも関係のある事として捉えていることがわかった。

児童が熊本地震に当事者意識をもち情報収集する一方で、図2から分かるように、被災地からの情報の中に、嫌だな（見たくない・聞きたくない）と感じるものがあったと回答した児童が59%であった。およそ6割の児童が、被災地からの情報で不快な気持ちになったことがわかった。

下の表2は、具体的な回答の様子である。多くの傷者や死者・行方不明者が出たことに嫌だと感じていることがわかった。(13人) その後の聞き取り調査では、その理由として、「かわいそう」という気持ちの他に、具体的な住所や氏名が公表されることで被害の様子を生々しく感じることで嫌だと感じていることがわかった。また、熊本城が壊れる様子についても9人の児童が嫌だと感じていた。これもその後の聞き取りにより、大きな建物が壊れるという理由の他に壊れる瞬間を動画で見ることで恐怖心が増したことが分かった。また、中には、決定的な瞬間を報じたリポーターの興奮した話しぶりに違和感を抱いた児童がいた。このように、被災地からの情報により恐怖心から嫌だと感じるだけでなく、実名報道や決定的瞬間を捉えようとする報道の在り方に嫌だなど感じる児童も見られた。

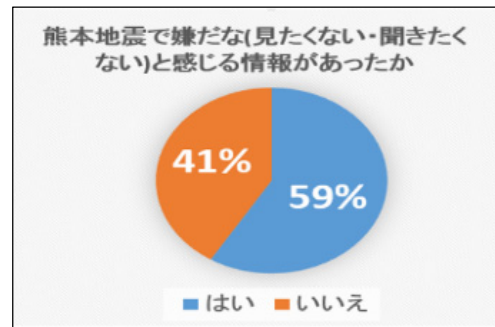


図3 5年3組熊本地震アンケート結果2

表2 熊本地震の報道で児童が嫌だな（見たくない・聞きたくない）と感じた情報（複数回答可）

見たくない・聞きたくないと感じた情報	人	アンケート用紙の記述
多くのけが人や亡くなった人がでたこと	13	「死んだ人とか放送されたから、熊本の人がかわいそうだ」思った。
熊本城がこわれたこと	9	歴史好きなので熊本城がくずれたのがショック
家や建物などがこわれたこと	6	
生き埋めや行方不明になっている人のこと	4	人々がたくさんなくなっていき、行方不明の人まわっていること。
余震が続いているということ	1	
逃げている人たちの悲しそうな顔	1	
子どもがこわがっている様子	1	人が死んだり家がなくなっでこまっているという情報。
緊急地震速報の警告音	2	

これらのことから、熊本地震における被災地から発信される情報を基に教材開発することは、児童が社会問題に対する社会的意見の質を高めるために、問題意識や切実感をもって向き合わせるために有効であることが分かった。

実際には、被災地からの情報に対して自分たちも含め不快に思っている人がいるという社会問題を解決するために「情報を発信する側や受信する側が大事にしなければいけないことは何かを考えて意見文にまとめてテレビ局に提出しなさい。」というパフォーマンス課題を提示した。

イ 複数の立場を考慮しての判断と提示資料の工夫

パフォーマンス課題を受け、児童は学級全体で調べるべき問いを作り、実際にどのような情報がどのように発信されたのかを調べた。また、どのような情報が問題視されているのかを基に、児童が最も不快に感じた「熊本城が壊れている様子」など3つの状況下での情報について必要性を考えさせた。

その際、より多くの異なる立場から考えることができるように、「視聴者」としての自分の立場の他に「報道関係者」と「被災者」という自分とは異なる立場を児童から引き出して考えさせた。これら三者の立場から考えさせることで、多角的な見方ができるようにした。しかし、そこで問題となるのが、取材方法である。根拠のある意見にするには、当事者に対するインタビュー取材などが必要である。しかし、児童が「報道関係者」や「被災者」への取材を十分に行なうことが難しいと考えられたため、指導者の方でもそれらの立場への取材を行った。右の図4は、被災者の立場からの資料である。熊本城で働く方にインタビューを行ない、その様子を撮影した動画（約3分）を児童に視聴させた。また、その動画資料を基に資料を作成し、児童に配付するとともに教室に掲示した。同じ被災者としても、下線部①と下線部②から、年齢層の違いにより考え方の違いがあることが分かった。立場は同じでも年齢層などで考え方が違うことがあると言うことも分かり、児童の考えを広げる意味でも有効な資料となった。

また、右の図5は、報道関係者の立場からの資料である。地元テレビ局のアナウンサーで、熊本地震では現地からレポートをした経験がある。指導者でインタビューを行い、その様子を撮影した動画（約1分）を児童に視聴させるとともに、資料として配布、掲示した。これら、2つの資料から、児童は、取材が難しいと考えられた被災者と報道関係者の立場からの意見について、その根拠とすることができた。視聴者については、自分自身の他に家族なども視聴者の一人として考え、家庭でインタビューなどを行っていた。

右の図6は、A児のワークシートである。熊本城がこわれる様子を伝える情報は必要かという論題に対し、「報道関係者」や「被災者」、「視聴者」の3者の立場から考えることができていた。また、A児は、「必要」と「必要でない」の両面から考えた上で、最終的に「必

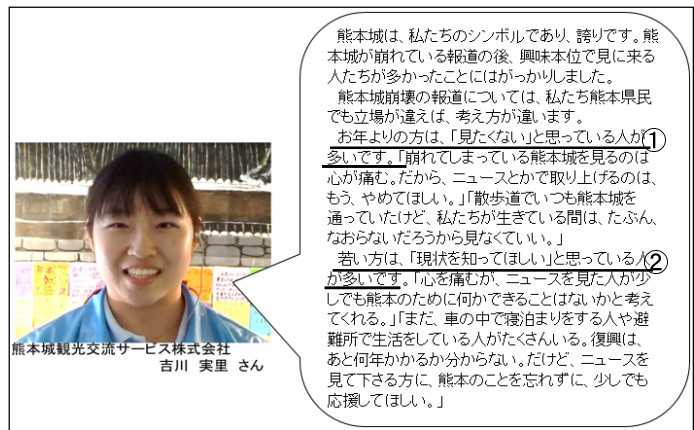


図4 被災地の人への取材から作成した資料

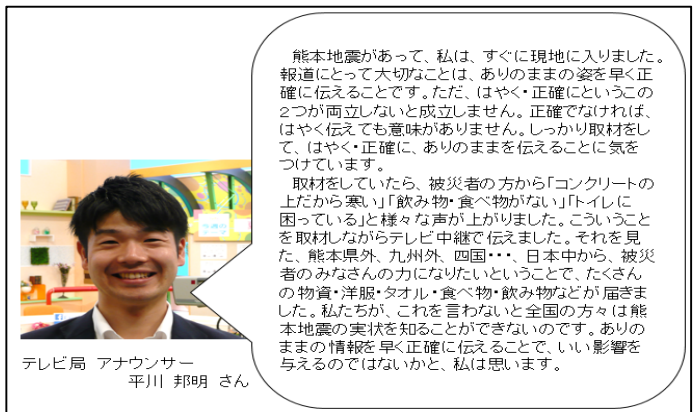


図5 アナウンサーへの取材から作成した資料

ミニ討論3 熊本城がこわれる様子を伝える情報は必要か、必要ないか	
必要	<p>報道関係者 現状を知りたい、<u>はやく正確ありのままに伝える</u>③</p> <p>被災者 <u>それはあるないと、わかるから、みんなの力を借りたい</u>④</p> <p>視聴者 熊本城を見に行きたかった、<u>テレビではよくわかる、おうちでテレビを見ればわかる</u></p> <p>報道関係者 <u>おかしな話だと思ったら、わかる。</u></p>
必要でない	<p>被災者 <u>よくこわれている事知っている(昔で) 観光客が残るお年よりの人は見たくないと思ってる</u>⑤</p> <p>視聴者 <u>風死者が減る中から、復元見たいじゃない? じしんがあつたという事だけであつたとしてもわかる。</u></p>

図6 A児のワークシート (一部)

必要	<p>被災者 自分以外の市や町、村はどうなっているのか、知りたい。</p> <p>報道関係者 現状を、してほしい(若い人)</p> <p>被災者 熊本がこわれただけの被害を受けたのか、知りたい。</p>
必要でない	<p>報道関係者 熊本城より、今の状況を伝えたい。(震度など...)</p> <p>被災者 シンボルでもある熊本城がこわれるなんて... (年配の方) ほんごくで見たくもない。心かいたむ。</p>

図7 B児のワークシート (一部)

要」であると判断したことが分かる。下線部③④⑤からは、図4や図5で示した資料を根拠に記述していることが分かる。前頁の図7はB児のワークシートである。下線部⑥から分かるように、B児も被災者という同じ立場でも若い人とお年寄りで、考え方が違うということを踏まえ、必要という判断をしていることが分かる。A児やB児に代表されるように、クラスの全員が3者の立場から考え、それぞれの立場での考えを踏まえた上で、その情報が必要か必要でないかを判断することができた。

ウ 3回のミニ討論とそれらを総合してのパフォーマンス

被災地からの情報といってもいろいろな状況での情報が考えられるため、3つの状況下での情報を取り上げ、その必要性についてミニ討論を行った。下の表3は、3回のミニ討論の論題や使用した写真等である。尚、ミニ討論とは、討論時間が10分から15分の短時間で行う討論のことを示している。

表3 ミニ討論の論題や状況を示す提示資料




ミニ討論 1	ミニ討論 2	ミニ討論 3
		
<p>論題 1 深夜、休んでいる被災者にライトをあてて取材する情報は必要か</p> <p>地震直後、春先の深夜にも関わらず余震の恐怖から建物の外で一夜を明かそうとしている状況 (取材時のモラル・プライバシー)</p>	<p>論題 2 亡くなった人の名前やプロフィールを伝える情報は必要か</p> <p>亡くなった人の身元が判明し、警察からの発表が続いている状況 (個人情報)</p>	<p>論題 3 熊本城がこわれる様子を伝える情報は必要か</p> <p>熊本城が壊れている状況、また余震により更に壊れている状況 (文化財・シンボル) 写真と動画で資料提示を行った</p>

表4の中にあるように、ミニ討論1では、取材時の報道関係者のモラルについて考えさせた。視聴者に分かりやすく情報を伝えるにはライトをあてる必要があるが、疲れた被災者にとってはそれがどうなのかが討論の中心となった。

右の表5は、ミニ討論1での板書を掲示用にまとめたものである。赤で囲ってある文字や文章は、児童がその討論でキーワードとして挙げたものである。「深夜、休んでいる被災者にライトをあてて取材する情報は必要か」という論題に対し、討論の序盤は被災者の立場として「ストレスで眠れない」や「こんな状況でテレビなんか映りたくない」といった意見が多かった。根拠としては、深夜であることや、写真からカメラに背を向

表4 ミニ討論1での板書を掲示用にまとめたもの

ミニ討論1 休んでいる被災者にライトをあてて伝える情報は必要か		
必要		必要ない
<ul style="list-style-type: none"> ○見てくれる人が増える→視聴率アップもうかる ○まずは、伝えることが大事 ○大変さを伝えたい ○現状を伝える、早く 今 ○災害への準備ができる (見てくれる人への注意になる) ○物資の支援につながる 	報道関係者	<ul style="list-style-type: none"> ○自分たちもあぶない
<ul style="list-style-type: none"> ○現状を知ってほしい ○情報を伝えるのは大事 ○相手の気持ちを考える 	被災者	<ul style="list-style-type: none"> ○ストレスになる ねむれない ○うつりたくない ○悲しい
<ul style="list-style-type: none"> ○情報は必要 ○ライトは必要 ないと見えにくい ○深夜だけど自分たちの家族はみんな起きて見ていた ○はやく知ることで支援につながる 	視聴者	<ul style="list-style-type: none"> ○他の番組がみたい →地震報道を放送局で分担すればいい ○残こくな映像だから ○深夜だから見る人は少ない ○※一つの情報がすべてではない ○→全部がこの状況でない ○信じごまない

けている被災者がほとんどであったことなどであった。その後、報道関係者としての立場から、「誰もが見たい情報だから見てくれる人が増える。見てくれる人が増えれば視聴率が上がり、会社がもうかる」といった意見が出された。また、報道機関が事実を国民に伝達する自由である報道の自由を根拠にする意見が出された。また、アナウンサーの言葉を根拠にし、「現状をはやく伝えることが大事であること」やそれが「次の災害への準備」や「支援」につながること

表5 ミニ討論2での板書を掲示用にまとめたもの

ミニ討論2 亡くなった方の氏名やプロフィールを伝える情報は必要か	
必要	必要ない
○どの地区で亡くなった人が多いのかを伝えることができる。(あぶない地区) ○事実を伝えることが大事 ○情報を必要とする人がいる ○死者がでるぐらいの大きな災害であることを伝えられる。 →まわりの支援につながる(県, 国) ○正確に伝える	○調べる手間がかかる
○現状を伝えることができる ○家にもどるとあぶないことがわかる ○すぐに避難しようと思う ○具体的な情報(わかりやすい)	○個人情報を出したくない ○そっとしておいてほしい ○がまんしないとイヤ
○今まで以上に気をつけるようになる ○知り合いに何かあったかわかる ○自分で知ることができると →自分だったらどうする 自分のこととして考える ○事実を受け止めることが大事 ○配慮が必要	○何度もくりかえしは悲しい 他の情報と比べる 自分で確かめる

などが出された。そんな中、情報を伝えることは大事だが、情報を発信する側として「相手の気持ち」を考えることも必要であるという意見が出された。最後には、被災地が全てこのような状況かどうかという話題になり、この場所以外では違った状況が考えられるため、情報を受信する側として「一つの情報が全てではないから信じ込まない」と意見が出たところで討論は終了した。

ミニ討論2では、個人情報の取り扱いについて考えさせた。「亡くなった人の名前やプロフィールを伝える情報は必要か」という論題に対し、報道関係者として「危ない地区を伝えることができる」といった意見が出された。これは、亡くなった人の名前の他に住所が報道されたことを根拠としていた。その後、必要ないという被災者の立場の意見として、名前や住所は個人情報であり「悲しいニュースで使われるのは嫌」や「そっとしておいてほしい」といった意見が出された。しかし、その後は必要であるという意見として、「事実を伝えることが大事」や「親戚とか知り合いとか情報を必要とする人がいる」、「家に戻ると危険ということを伝えることで、今後の被害を少なくできる」といった意見が出された。また、この情報により視聴者をはじめ県や国など多くの支援が集まることにつながるという意見も出された。

ミニ討論3では、文化財やシンボルについて考えさせた。「熊本城がこわれる様子を伝える情報は必要か」という論題に対し、討論の途中下の表7のような意見が交わされた。

表6 ミニ討論3の様子

<p>C児 被災地では、今でも車で寝泊まりしている人たちがいます。僕は、そんな人たちを見ると援助をしたい⑦と思うので、必要だと思います。被災地の人もそんな様子をみんなに知ってほしい⑧と思っています。</p> <p>D児 私は必要ないと思います。吉川さんが話してくれたように、熊本に昔から住んでいるお年寄りにとって熊本城はシンボルであって、それが壊れるところは見たくない⑨と言っています。</p> <p>E児 見たくないと言っても、この映像を流さないと熊本県以外からの援助金⑩が来なくて、ずっと壊れたままになっているかもしれません。でも、これを流して援助金に来て熊本城を直せば、お年寄りも喜ぶと思います。</p> <p>F児 付け加えて、Dさんがシンボルと言ったように、そんな大切なシンボルが壊れていることを伝えることで援助金を集め、復元したらいいと思います。</p> <p>G児 まとめると、シンボルである誇り⑪の熊本城がこわれるぐらいの大きな地震であることが分かって、それによって募金をしようとか少しでも熊本のためになろうと考える人が増えるので、必要だと思います。</p> <p>H児 アナウンサーも、はやく正確にありのままに伝えることが大事⑫だと言っていたので、私も必要だと思います。</p> <p>I児 熊本の親戚に聞いたんですけど熊本城から離れたところに住んでいる人にとっては、同じ熊本でも熊本城の様子は分からないので、正確な情報は必要だと思います。</p>

手立て

ミニ討論3では、ミニ討論1と2を生かした発言が見られるようになった。下線部⑦や⑧、⑫はミニ討論1でキーワードとして挙がっている内容である。また、下線部⑩はミニ討論2で支援の広がりとしてキーワードになった内容である。下線部⑨や⑪は、ミニ討論3で新たなキーワードとして挙がったものである。また、下の図8は、ミニ討論3の後のパフォーマンスである。下線部⑬、⑭から分かるように情報を発信する側と受信する側で大事にすべきことを、これまでの3回の討論のキーワードを使って総合してまとめることができていた。

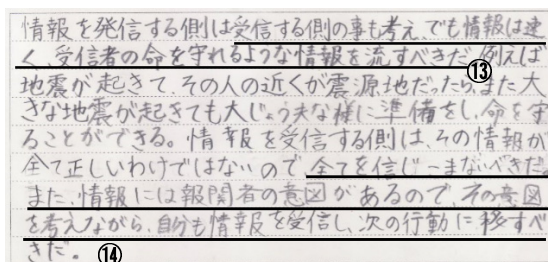


図8 ミニ討論3の後のパフォーマンス

4 結果と考察

今回、社会的意見の質を高めるために大きく3つの手立てを基に、授業づくりを行った。手立て①に関しては、児童が地震の揺れを感じたり嫌だと感じたことが社会問題として取り上げられたりしたことが問題意識や切実感をもつことにつながったと言える。②に関しては、ミニ討論後のパフォーマンスや単元末のパフォーマンスにおいて複数の立場で価値判断の根拠が書くことができているかどうかを基に考えた。結果は、ミニ討論後のパフォーマンスでは全員が3者の立場から、単元末のパフォーマンスでは、9割以上の児童が2者の立場から、6割以上の児童が3者の立場からの根拠を基に価値判断することができていた。このことより、複数の立場から多角的に論題に対する価値判断を行っていることが言える。提示資料については、それぞれの立場からのインタビュー動画が、児童の価値判断の根拠となっていること分かった。同じ被災者の意見としても年齢層によって否定的な意見があったり肯定的な意見があったりと思いを揺さぶる資料として効果的であったと考えられる。手立て③に関しては、9割以上の児童が複数の討論であがったキーワードを基にパフォーマンスに取り組むことができた。このことより、児童が被災地の複数の状況を考慮した上でパフォーマンスに取り組んでいることが言える。

これらのことにより、児童は、パフォーマンス課題に対し多角的な見方をしながら考え、パフォーマンスとしての社会的意見の質を高めることができたと考えられる。

5 成果と展望

- 熊本地震の被災地からの情報という社会問題を取り上げて教材化することで、児童が問題意識や切実感をもってパフォーマンス課題の解決に取り組むことができた。当事者からのインタビュー動画が、資料として効果的であった。
- 単元の中に複数回のミニ討論を設定し、複数の立場から考えさせるとともにそれらを総合してパフォーマンスにつなげるという学習過程が、多面的な見方をさせる上で有効であった。
- 論題に目的を加えるかどうかは、討論の目的を考え、何について考えさせたいのか意図を明確にさせておく必要がある。